# 強要

## —不完全な文を解釈することを強要された場合に我々に出来ること—

外池 俊幸


### 概 要

辞書に記載されるべき語彙的情報の問題を論じた。語彙的情報を、素性とその値の組として離散的に記述することを仮定するが、語彙項目ごとに静的に記述するだけでは、私たちの語彙的知識の使用の実態を捉えられない。語彙的知識の生成的運用を保証する機構を考え、辞書を生成的にする方向を論じた。具体的には、例えば、形容詞の段階性／非段階性に関して、規範的には個々の形容詞にはどちらかの値が振られるが、反対の値を要求する副詞と共起した場合には、その値での解釈を強要されることになる。他にも、ある特定の意味的タイプを要求する述語とそのタイプではない名詞が共起すると、名詞の側を要求されているタイプに変換する解釈が強要される。また、指示の転移に対処する場合も強要の例だと考えられ、強要という捉え方で柔軟な対応が必要な言語現象はかなり多く、それらに対処する方向を検討した。

Problems how to describe lexical knowledge stored in our mental lexicon are discussed. Although we assume that lexical information is described by giving feature-value (values are discrete) pairs to lexical items, only with static lexical descriptions we cannot capture the ways how we use lexical knowledge. We consider the ways how to make the lexicon generative, as we must capture the ways we use lexical knowledge in everyday life. More specifically, adjectives are prescriptively divided into two types: gradable/non-gradable and when an adjective is combined with an adverb which forces it to be of the other type, type coercion occurrs. Also reference transfer can be taken as an example of coercion. There are various phenomena which can be regarded as examples of coercion and the ways to deal with such examples are discussed.

キーワード： 強要 (coercion)、生成的辞書 (generative lexicon)、素性／値 (feature/value)、段階性／非段階性 (gradability/non-gradability)、タイプ強要 (type coercion)、指示の転移 (reference transfer)

## 1 まえがき

伝統的な生成文法においては、言語能力と言語運用を峻別し、言語能力を明らかにすることを目標として研究が進められてきた。本稿では、言語能力も言語運用も言語に関わる制約だと考え、その制約間の関係を検討することを目指す。言語能力と言語運用の区別は、人間が持っている言語に関わる知識の中核を捉えるために提案された区別だと考えられる。しかし、言語能力に関する制約と言語運用に関する制約の関係を捉えようとすると、言語能力がどのように運用されるかを問題にすることになり、特に個々の語彙項目に関する制約は、必ずしも安定しているわけではないと考えられるので、そういう不安定な特性を反映したアーキテクチャを考えなくてはならなくなる。結果として、辞書自体を通常考えられているよりもはるかに広い意味で生成的なものにする必要が出てくる。言語運用の実態を考えると、適切な解釈を探すのが何らかの意味で難しいと感じられる例は多い。その中には、語彙的知識の中で安定していると考えられるものだけでは対処出来なくて、解釈が難しいと感じられるものがある。そのような例を解釈することを「強要」された場合に、私たちに出来ること／行っていることを論じるのが本稿の目的である。具体的な例を取り上げ検討する。[1,2]

[1]強要 (coercion) の問題を考えるきっかけは、Stanford 大学の Ivan A. Sag 教授が 1990 年 10 月に来日され、早稲田大学で 'Taking performance seriously' と題した講演 (Sag 1990) をされ、それを聞いたことだった。言語運用の問題を真剣に考えると、指示の転移など強要の例だと考えられる問題に対処する必要があることを強調された。

1994 年 12 月 20 日から 22 日まで、国際日本文化研究センターで、日米の研究者が集まって開かれた「制約に基づく日本語の構造の研究」と題したワークショップで筆者が行った発表 (Tonoike 1994) に対してコメントを下さった方々に感謝します。また、ドラフトを読んでコメントを下さった獨協大学の井口厚夫氏に感謝します。さらに、白井賢一郎氏からの「語義の転移 (sense transfer)」と「指示の転移 (reference transfer)」とを区別した方がいいというコメントは、ドラフトを大幅に書き直すのに役だったので記して感謝します。

論文の副題で「不完全な文」という表現を使ったが、実は、問題は「文」だけに限定されているわけではなくでなく、「句」も含まれる。文を動詞句だと考えると、動詞句はすべて含まれる。しかし、複数の要素の結び付きが無ければ強要は起こらないと考えられるので、語が単独で単純に句を構成するものは除外出来るだろう。しかし、補部の省略のように、暗黙の補語の存在を仮定しなくてはならないものは、単純に句を構成しているのではないと考えられるので、強要の起こる場合に含める。結び付きがあれば、単位は語でなくてもよく、形態素でもいいはずで、本来は形態素の結び付きも検討すべきだが、今回は語の結び付きを中心に検討した。

「不完全な句」ではなく、「不完全な文」にした動機は、コロケーションに関する情報を参照して強要に対処していると考えられる場合を含めたかったからである。

[2]HPSG の枠組みでの強要の研究では、いくつかの言語現象が取り上げられている。（詳しくは Pollard and Sag (1994: Note 20, pp. 309–310) を参照。）例えば、complement control の問題 (Sag & Pollard 1991, Pollard & Sag 1994)、measurement と quantification の分析 (Gunji & Hasida 1994) などがある。

## 2 静的辞書記述とその動的運用

生成文法の研究の歴史では、70年代終わりから現在にいたるまで、文法のモジュール構成のなかで、辞書 (lexicon) に多くの情報を移そうという流れが続いていると考えることが出来る。そして、辞書に登録される語彙項目にどのような情報を与えるべきかについての議論が行われている。(このような動向については Sag and Szabolcsi (1992) の編者による簡潔なまとめを参照。)

まず語彙的情報の記述方法に関して、次の2点が問題になる。

(1) a. 素性とその離散的な値を記述のために使うかどうか。
b. ある値を取るか取らないかを確定的に(静的に)記述するかどうか。

この論文では、主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structre Grammar: HPSG) の理論に従い、文法記述には複雑な内部構造を許す素性とその値の組を使う。( HPSG の概要に関しては、Pollard and Sag (1994) 、HPSG の日本語への適用に関しては、Gunji and Hasida (in preparation) を参照。) 素性の可能な値としては、離散的な値を仮定する。複雑な内部構造を認めるだけでなく、さらにその値に連続的な量を割り当てる方向もあるが、本稿では、その方向での検討は行わない。確定的に記述するかどうかに関しては、検討すべき問題が多い。比較的安定していると考えられるものは、語彙化しているとみなし、辞書に確定的な情報として記述すると考えることに大きな問題はないであろう。しかし、辞書に登録されている情報に関して、確定的に記述されたものだけが使われると考えるのは、私たちの言語運用の実態を考慮すると適切ではない。類推などによる語彙的知識の動的運用をどう捉えるかは重要な課題である。Pustejovsky (1991, 1993), Pustejovsky and Boguraev (1993) が、辞書を生成的 (generative) にする方向を論じている。辞書を生成的にするということは、確定的に記述された語彙的情報だけでは対処出来ないような例を解釈することを強要された場合に、私たちが行えること/現に行っていることを反映した辞書の設計を考えるということである。

## 3 素性の他の値での解釈の強要

### 3.1 形容表現における段階性の強要

形容詞は、程度副詞で修飾出来るものと出来ないものとの2つに大きく語彙的に分けられると考えられる(形容詞の段階/非段階性について、詳しくは外池 (1990, 1992) を参照)。例えば、次のような例が挙げられる:

(2) a. 彼は背が高い。
b. 彼の意見は正しい。

(2a) は、「とても」など程度を問題にする副詞で修飾出来るが、「ほとんど」などの概括量副詞（工藤 (1984) の用語。程度副詞全般について詳しくは工藤 (1984) を参照）で局所的段階性を読み込むことが出来ず、「彼は背がほとんど高い。」というのは不自然であり、(2b) はその逆で、「彼の意見はとても正しい。」とは言いにくい。

日本語の程度副詞、例えば「とても」と「ほとんど」、と段階的／非段階的な形容詞、例えば「美しい」と「等しい」には、次のような記述が必要になる。（記述方法は、大筋で Gunji and Hasida (in preparation) に従う。実際には、さらに詳細な記述が必要であるが、問題となる部分を示すだけにとどめる。）

(3) a. 「とても」 $\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{totemo} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{dep v}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{degree +}] \end{bmatrix}$

b. 「ほとんど」 $\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{hotondo} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{dep v}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{degree –}] \end{bmatrix}$

c. 「美しい」 $\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{utukusii} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos v}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{degree +}] \end{bmatrix}$

d. 「等しい」 $\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{hitosii} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos v}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{degree –}] \end{bmatrix}$

強要が起こる例として、「とても等しい」という結び付きを考えよう。

(4) とても等しい

$$\begin{bmatrix} \textbf{head} & [\textbf{pos v}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{degree +}] \end{bmatrix}$$

とても

$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{totemo} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{dep v}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{degree +}] \end{bmatrix}$$

等しい

$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{hitosii} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos v}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{degree –}] \end{bmatrix}$$

「とても等しい」という結び付き全体では、副詞の課す制限が強く **degree** は + になり、連続的なスケールで事態を捉え、比較出来るような解釈を探すしかなくなる。考えられる解釈は、例えば基準となる A があり、それ以外に B、C、D、E と問題にできる対象が複数あり、それらが A と等しい度合いを考え、それらと比較して「A は、B ととても等しい」というようなものだけである。この解釈が難しいと感じられれば、それは「等しい」の非段階

性が強固だということの反映で、副詞の強い段階性の強要に対して、「等しい」に本来振られている「非段階的」という値が抵抗しているのだと考えられる。[3,4] 文法的な素性と強要の問題との関係を考える際に重要な点は、どういう素性を仮定するかであり、さらにその素性の可能な値をどう規定するかである。可能な値には、認知的・言語的な制限が課されねばならず、ある素性の可能な値の広がりには当然制限があるはずである。しかし、多くの場合、個々の語彙項目には、ある素性に関して、ある特定の値が割り振られていて、その値での解釈しか考えないことが多い。どうしてかと言えば、個々の言語話者は、ある語彙項目にある値が割り振られていて、その値に同調していると考えられるからである。しかし、可能な値は、まさに可能な値で、多くの場合に、他の値での解釈を想定することが出来るのではないか？さらには、可能な他の値を割り振ることを、臨時的であれ恒常的であれ、行う人がいる

[3] *Collins COBUILD English Language Dictionary* (Sinclair 1987) は、形容詞が段階的であるかないかを文法的な特徴として取り上げている。段階的な方を QUANTITATIVE 、非段階的な方を CLASSIFICATORY と呼んでいる。英語の形容詞も、日本語の形容詞と同様に、大半が段階性を持つ。数の少ない非段階的な例として Sinclair (1987) は、dead, circular, single (not married) などに CLASSIFICATORY を振っている。

[4] 他に、アスペクトに関わる素性でも、可能な値のうちで他の値を要求する要素と結び付くと解釈の強要が起こる例がある。既に 外池 (1993: 8–10) で論じたが、日本語では、次のような場合が考えられる。

(i) ?死に始める。

(ii) 腐り始める。

動詞とアスペクトを表わす要素である「始める」との結び付きを考えると、(i) は少し不自然な感じがするが、(ii) は自然だと感じられる。しかし、本来的には両方とも「始める」が付かないタイプなのだと考えた方がよさそうである。「腐り始める」が自然だと感じられるのは、捉え方の転換が強要された結果であると考えられるのである。外池 (1993: 9) から引用する:

> 「一つの個体を考える（その全体だけを問題にして、部分は見ない）場合には、言語的には始点を見ないので、何かは一瞬にして「死に／腐り」、そしてその状態が持続する。しかし、見方を変えて、対象の部分を見る、あるいは、数えられる対象を複数考え、その一部を問題にすると、「変化の過程」を問題に出来るようになり、「死に始める」も「腐り始める」も言えるようになる。つまり、「変化の過程」が問題に出来るか出来ないかが、対象を単一の個体として捉え、その部分を見ない場合と、単一の個体でもその部分を見るか、この自然な拡張であるが、複数の個体の何個かを問題にする（複数の個体を一まとまりと考え、その「部分を見る」ことになる）かのどちらかである。このような強要が頻繁に起こり、一種の convention になってしまったのが「腐る」の例で、「死ぬ」の方はまだそこまでいっていないと考えると、この二つは元々一つのタイプ（「始点を見ない」=「始める」が付かない）だと考えた方がいいように思われる。」

素性を使った記述を考えると、以下のような記述が必要になる。

(iii) $\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{sinu} \rangle \\ \textbf{aspect} & \begin{bmatrix} \text{whole: *hazimeru} \\ \text{(part or plural: hazimeru)} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

(iv) $\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{kusaru} \rangle \\ \textbf{aspect} & \begin{bmatrix} \text{(whole: *hazimeru)} \\ \text{part or plural: hazimeru} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

ここで問題にしている「始点」を見るか見ないかという点に関して、「死ぬ」と「腐る」は、「始める」とだけの結び付きを考えた場合の優位な素性の値に違いがあるだけなのだと考えられる。つまり、優位な解釈では、「死ぬ」には「始まる」が付かない。個体の部分あるいは複数の主体を考えることを強要された場合に始めて、「死に始める」が言えるようになる。また、「腐る」は、優位な解釈では、部分あるいは複数の個体を考えるので、「腐り始める」が言える。部分も問題にしないし、複数の個体を考えもしないと、「腐り始める」が意味を持たなくなるが、「腐る」ではこういう見方をしないことが慣習化しているのである。

可能性がある。そういう人は異なった値に同調しているのだと考えられる。

異なった値を割り振ることがあるという例として、英語の形容詞の例を挙げることが出来る。段階性／非段階性に関して、英語の形容詞の中で、規範的には非段階的だと考えられているものがいくつかある。具体的には、perfect, absolute, unique, . . . などである。これらの形容詞は、歴史的に規範文法 (prescriptive grammar) と呼ばれる規範的な文法が考えられた際に、very などの程度副詞で修飾することが意図的に禁止された。「意図的に禁止された」ということが重要で、禁止されたということは、程度副詞で修飾することが実際に行われていたということを示している。行われていたからこそ禁止されたと考えるしかない。そうすると、例えば unique に段階を読み込む捉え方が実際に行われていたことになる。

日本語でも同様のことが観察される。例えば、次のような名詞（形容動詞）述語文を使う人がいる：

(5) 今回の本部の対処はとても謎です。

この文は私には、不自然に感じられる。「謎だ」には普通程度を読み込めないので、「とても」で修飾することは出来ないと考えられるのに、それに違反しているからである。しかし、意図していることは理解出来る。

ある素性が本来振られる要素は、その素性でのすべての可能な値での解釈を、本来想定することが出来るのではないか。なぜなら、可能な値の間には制限があり、ある素性の可能な値であるということは、その制限を満たしているはずであるから。このような可能な値での解釈の強要は、本来的には可能な解釈の強要であり、述語が課す意味的なタイプの変更の強要は、必ずしも出来るとは限らない解釈の強要である。述語により意味的なタイプに関しての制限は異なるので、そのタイプと合わない場合にタイプの強要が起こる。もう１つの場合は、語義の転移であり、語義の転移の可能性を意味的タイプの転換と考えると、名詞の可能な転移のタイプには、ある種の制限が課されていると考えられる。この３つを区別することが重要である。

(6) 強要の分類：素性の値と意味的タイプ

- i. 文法的な素性の可能な値での解釈の強要－可能な値は限定されている
- ii. 語義の転移／拡張の可能性－異なった意味的タイプでの解釈の強要
  - a. 語彙化していれば、その意味的タイプで解釈する
  - b. 語彙化していない場合に、意味カテゴリが同じ他の語でその意味的タイプでの語彙化が起こっている場合、その意味的タイプで解釈する
- iii. 異なった意味的タイプでの解釈の強要

# 4 意味的なタイプの転換

## 4.1 主要部の省略

述語の名詞への選択制限を記述する方法として意味素性を使う方法が伝統的によく使われてきた。そして、意味素性として仮定されるものは、名詞の意味的なタイプを表していると考えられるものも多い。(実際には、語彙的な制約として使われていると考えられる意味的タイプと、意味素性の関係、さらには unification という操作を活かせる形での意味的タイプと意味素性の記述を検討する必要があるが、本稿では行わない。) 名詞の語義記述の問題を検討しよう。多くの名詞は多義的であると考えられる。しかし、似たタイプの名詞同士でも語義の拡張が進んでいるものとそうでないものとがある。語義の拡張を考える際に、個々の可能性を離散的であると考えるか、連続的につながっていると考えるかが問題になる。ここでは、離散的であると仮定した方が検討を進めやすいので、離散的であると仮定する。「電話」という語を考えてみよう。

(7) a. 急いで電話を買わないといけない。
　　b. 電話はどこにありますか。
　　c. ジョンから電話がありました。

それぞれ、「電話の使用権」、「電話器」、「電話の通話・(で) の連絡」の意味だと考えると、それぞれ主要部 (head) である「使用権」、「器」、「通話・連絡」が明示されず、補部 (complement) である「電話」だけで使われている。こういうある種の省略が慣習化すると、語彙化 (lexicalize) したと考え、辞書に登録する必要が出てくる。次の例は母語話者の間でも慣習化していないと感じる人も多い:

(8) 彼女の電話を知っていたら教えて下さい。

ここで問題なのは、「電話」を「電話番号」の意味で取れるかどうかである。名刺などで、電話番号を書く必要がある場合に、単に「電話」と書くことからも、「電話番号」の意味で語彙化している人もいるのではないかと考えた。しかし、英語でも phone と書くが、Please tell me your phone. は変だと母語話者には感じられるようで、これは十分な根拠にはならないかもしれない。むしろ、上の例文を解釈することを強要されると、「知る/教える」がその項に課す制限と「電話」との間で意味的なタイプに関するエラーが起こり、適切なタイプでの解釈として「電話」に関係するものを探すことを強要され、要求されているタイプに合った候補として「電話番号」という解釈が出てくると考えるべきかもしれない。しかし、Lehrer (1990) も述べているように、語彙化には広範な規則性も見られるが、多くの語彙的例外があり、慣習化すると個々に語彙化されることになるので、「電話」と「番号」との結び付きが強ければ、「電話番号」の意味が、辞書の中で「電話」に登録される可能性が出てくる。では、「電話」の語彙記述を考えよう。

(9)
$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{denwa} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos n}] \\ \textbf{sem} & \begin{bmatrix} \text{'denwa'} & \\ \textbf{type} & \left\{ \begin{array}{l} \text{:apparatus,} \\ \text{:call,} \\ \text{:(number)} \end{array} \right\} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

「電話」の語彙記述には、何らかのかたちで意味のタイプに関しての情報を含めるべきだと考えられる。ここでは簡単のために **type** の下に語彙化していると考えられる apparatus と call を並べて書き、可能性がある number を丸括弧に入れた。apparatus であるか、call であるかのどちらかであり、場合によっては number も可能になるということである。さらに詳細な記述を行うためには、denwa 自体をタイプの違いで下位区分する必要があるだろう。[5]

辞書には私たちが持っている語彙的な知識が蓄えられていると考えると、具体的な語彙項目同士の結び付きの中で、語彙項目ごとに課せられている語彙的制約を参照して結び付けたり、解釈したりしていると考えられるもの（自由語彙結合 free lexical combination と Benson, Benson, and Ilson (1986) は呼んでいる）と、実際には結び付き自身がよく使われるので、一々個々の語彙項目ごとの情報を参照するのではなく、結び付き自体を蓄えているのではないかと考えられるものとの区別を考えることが出来る。生成文法の研究では、一般性を追求することがおおく、後者の具体的な結び付きをそのまま蓄えるということが論じられることは比較的少ないように思われる。

しかし、これは、最近の自然言語処理に関する研究で重要な方向として注目されている「用例・事例ベース」の考え方に対応する方向である。具体的な結び付きを問題にする方向を言語学的な観点から考え直してみると次のようなことが言えるであろう。個々の名詞ごとに、他の要素（例えば述語、連体修飾、複合語など）との結び付きの中で、問題の名詞に典型的なものとそうでないもの、問題の名詞に特徴的な機能に関わるものとそうでないものとの区別があると考えられる。本稿では、前者のような結び付きを「コロケーション」と呼ぶことにする。例えば、具体物 (concrete) という素性が振れるようなもの、語あるいは語義）ならば、「が燃える、に触る、を見る」ことなどが出来るであろうが、例えば「時計」は、「商品」として、「買う、売る」ことが出来るであろうし、「高い、安い」とかが問題に出来る。また、本来の「機能」を考えると、「進む、遅れる、壊れる、故障する」ことがあるし、「正確だ、不正確だ」ったりするし、「合っている、合っていない」ことが問題になる。合成語として、

[5]筆者は、IPA（Information-technology Promotion Agency: 情報処理振興事業協会）で進められている日本語辞書開発プロジェクト (IPAL-exicon) に関係している。本稿では、一応「IPAL 名詞編」（1995 年春公開予定）で採用した意味素性の体系（56 個の意味素性を仮定している）を想定している。実際に、「IPAL 名詞編」では、意味素性の違いを下位区分の基準として使っている。そして、「電話」の記述では、意味素性よりもさらに細かな意味的なタイプの区別である *apparatus* と *call* を区分している。IPA (to appear) 参照。

「腕、掛け、置き、砂、日、高級」などが考えられる。これらの情報を「時計」に関する記述のどこかに含めるか、少なくとも参照出来るようにしておく必要が出てくるのではないだろうか。「電話」に関しては、それを要素として含む複合語の中で、「電話器、電話ボックス、電話番号」などが書かれていて、さらに、「器、ボックス、番号」などの形態素・語に関する記述がなされている辞書の部分を参照出来るように辞書全体を設計すべきだろう。そうすると、「電話を教える」ことは出来ないが、「教える」がその項に課す意味なタイプに対しての制限と、「電話」を要素とするコロケーションに関しての情報から、タイプの強要に対処する手段を提供出来るようになる。実際に我々はタイプの強要を強いられた場合、上で述べたような対処をするしかないし、そうすることで適切な解釈を探しているように考えられる。[6]

次に「台所」という語彙項目の記述を検討する。次のような例文を考えよう。

(10) a. お父さんは台所にいます。
　　 b. お父さんは台所に立っているところです。
　　 c. その番組が終わったら台所を手伝って。

(10a)「にいます」が要求する制限から考えて「台所」は「場所」を指していると考えられる。(10b) は、「台所に立つ」というのが、「ある場所に立つ」という読みと、「台所仕事をする」という読みの 2 つがあると考えられる。「台所仕事をする」という読みを、何らかの形で、「台所という場所に立つ」という意味とは別に辞書に記述する必要がある。問題なのは、(10c) で、この「台所」は本来は「場所」なのだが、ここではある「場所」で行われる「作業」を表していることである。

(11) a. その番組が終わったら台所仕事を手伝って。
　　 b. その番組が終わったら台所での作業を手伝って。
　　 c. その番組が終わったら台所での仕事を手伝って。

[6]井口 (to appear) が、必要な情報を欠いていると考えられる連体修飾節の解釈について、コロケーションに関しての知識を利用して、必要な情報を補えるかどうかが、解釈の難易を決めるのではないかという観点から、次のような連体修飾節の違いを論じている。

(i)　頭の良くなる本

(ii)　今晩のおかずが買える本

(i) は、「本」と結び付きの強い、「読む、書く、買う」などのコロケーションに関する知識を利用すると、「読むと頭の良くなる本」という関係節を復元することが比較的容易に行えるが、(ii) の例は、「その本を読むと、おかずの買い方がすぐに分かるので、その日のうちにおかずが買えるようになる本」というような関係節を考えるのであろうが、コロケーションの知識を使い簡単に復元出来るとは言いがたい。そこで、解釈の容易さの違いが出てくると考えるのである。

また、Croft (1993) が、Ronald W. Langacker の主張する cognitive grammar の枠組みでの、本稿で言えば語義の拡張、コロケーションとは何かを論じている。重要な点は、領域に依存した規定をしていることである。特にコロケーションの記述は、領域に大きく依存するであろうが、一般的な領域、あるいは領域の中にメタなレベルを想定するかなど難しい問題が多い。ここでは、個別の領域を想定はしないで、一般的な日本語を母語とする人の言語に関わる知識を考える。

さらに内容を特定するためには、(11a)–(11c) のような言い方をしないといけなくなる。(11a) の複合名詞の主要部は「仕事」であり、「台所」ではない。また、(11b)–(11c) では、「台所」は「台所」本来の意味である「場所」を表している。問題は、「台所」の語彙記述に「動作・作業」の語義を認めるかどうかである。ある「場所」で行われる「動作・作業」は、日本語ではほとんどの場合に、「場所」を示す語で一時的にではあるにしろ、示すことが出来るように思われる。次の例を考えよう。

(12) a. 玄関を手伝って。
b. 会場を手伝って。
c. 倉庫を手伝って。

しかし、問題は語彙化しているかどうかで、「台所」以外の、「玄関・会場・倉庫」などは、場所の語義を認めておいて、「台所」には、「動作・作業」の語義を認め、ほとんどの「場所」を表す名詞が、「手伝う」の目的語になると、「動作・作業」の意味になることを捉える必要がある。このように、語彙化している場合と、一時的に使われうる場合とを同時に捉えられる仕組みが必要である。これは、「場所－作業」という場合に限らない。主要部と補部との結び付きが強く、慣習化すると、補部だけで主要部を復元出来るようになるのだと考えれられ、「台所」が「作業」の語義を持つのは、その例だと考えられる。そして、このような例は、個々の語彙項目を子細に検討すると数多く見つかるだろう。

語義の拡張にも、素性とその値の組を使う記述方法を適用することが考えられる。意味的タイプを素性だと考えると、その可能な値の間に、拡張の可能性に関して可能な関係とそうではない関係があり、それが制約として記述されていると、ある名詞の意味的タイプに割り当てられている値で対処出来ない場合に、他の可能な値を探し、その解釈で名詞を解釈しなおすという捉え方である。（語義の拡張の可能性に関しては、Lehrer (1990) が、本稿とは異なった方向で議論している。）このような語義の拡張の可能性で対処する方向と、述語が要求する主要部に課している制限にあった主要部を補う場合とを区別すべきであろう。さらに、語彙的特異性と考えられるものは、また別なものだと考えなくてはならないだろう。しかし、語彙的特異性が、一般的な規則とある種の関係を持っているかもしれないので、これらの間の関係は、実際にはかなり複雑だと考えるべきだろう。

### 4.2 補部の省略

動詞などが本来必要とする補部が、ある範囲のものを指すという知識が共有され、補部を明示しない、言い替えると補部の省略が慣習化している場合がある。このような場合を、聞き手は明示されない補部を復元することを強要されているのだと考えてもよいだろう。典型的には、他動詞が補部として取る要素に対して、頻繁に行われる限定の仕方があり、その限定の仕方が多くの人の間で共有され、それが慣習化して可能になったと考えられる他動詞の

自動詞化の例が挙げられる。

(13) a. 今晩飲みに行こう。
b. to drink (alchoholic drinks)
c. to change (clothes, trains)

「飲む」が「酒を飲む」の意味で使われるが、この場合の「酒」は、例えば「日本酒」の意味ではなく、「アルコール飲料」の意味であり、個々の酒の種類を表す名詞の上位語であると考えられる。英語の例も、具体的な名詞が問題ではなく、「着るもの」、「乗り物」という上位語であり、実際には、文脈あるいは慣習化の支えがあるからこそ補部が明示されないので、上位語でさえも言及する必要がなく、あるいは明示してはいけなくて、動詞だけが使われることが重要である。

(14)
$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle nom \rangle \\ \textbf{head} & [\text{pos v}] \\ \textbf{sem} & \text{drink'(X,Y)} \\ \textbf{subcat} & \{\text{p[sbj,ga]:X, p[obj, } \boxed{1}\text{]:Y}\} \end{bmatrix}$$
COERCE: if $\boxed{1}$ is zero, then Y refers to alchoholic drinks

ここでは、「強要」される解釈に関する条件を、COERCE という語彙規則として記述した。COERCE には、「強要」される場合の条件と、その条件を満たした場合に可能になる「解釈」が記述されるので、'if ..., then ...' のかたちを取ると考えられる。可能な解釈がどこまで限定出来るか、的確に捉えられるかが重要になる。

ここで取り上げている他動詞の自動詞化は語彙化の過程であると考えられるので、(14) に対して次のような自動詞の記述が必要になり、両者の関係は **morph** などの部分を共有していることで辞書の中で関係付けられると考えられる。[7]

[7]本共同研究の共同研究者から次のような指摘を受けた。

(i) 「酒を飲む」という意味での「飲む」は、単に「酒を飲む」のではなく、「一定以上の量を飲む」ことが含まれるのではないか。

次のような文が問題になる。

(ii) 彼女は飲める。
(iii) 彼女は飲めない。
(iv) 彼女は飲まない。
(v) 昨日は飲んだ。

(i) と (ii) は、「彼女」の属性を表していると考えられる。そして、(i) は、指摘された通り「酒をある程度以上飲める」ことであり、(ii) は、「酒を全く飲めない」ことだけを意味するだけでなく、「酒をある程度以上飲めない」ことをも意味するように感じられる。しかし、次のように一般的な自動詞でも同様なことが言えそうである。

(vi) 彼女は歩ける。
(vii) 彼女は昨日は歩いた。

(15)
$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle nom \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos V}] \\ \textbf{sem} & \begin{bmatrix} \text{drink'(X,Y)} & \\ \textbf{covert} & \text{[Y: alchoholic drinks]} \end{bmatrix} \\ \textbf{subcat} & \{\text{p[sbj,ga]:X, p[obj,zero]:Y}\} \end{bmatrix}$$

## 5 述語による主要部を復元することの強要

Pustejovsky (1991) が、異なったタイプの解釈が強要される場合を論じている。タイプの強要というのは、述語が補部である名詞に課す制限が優先されるので、その制限に合わないタイプの名詞と結び付いた場合には、その制限に合うタイプの解釈を、その名詞と関係するものから探して、補うことを強要されることである。明示されたタイプの異なる名詞を補部とする名詞句の主要部として適切なものを探すことになる。述語の課すタイプに関しての制限に、主要部となる名詞のタイプが合っていないと、タイプの不一致は解消されない。次の英語の例を考えてみよう (Pustejovsky 1991: p. 424; 33a, c):

(16) a. Mary enjoyed the book.
b. John began a novel.

Pustejovsky は、'enjoy' はその項が 'property' type であることを要求し、'begin' は 'action' type であることを要求するが、どちらでもタイプエラーが起こっていると述べ、なぜなら、'the book' は、'property' ではなくて、'a novel' は 'action' ではないからであると言っている。しかし、英語と日本語には違いがあるようである。大体対応する日本語の文を考えてみると：

(17) a. メアリはその本を楽しんだ。
b. ジョンは小説を始めた。

まず、上の例は日本語では自然だと感じられる点が異なっている。日本語の「本」は、「本を読むこと／本の内容／本のストーリ」などの意味で使われ、主部（ここでは、「内容／ス

何かを出来ることを表現する場合には、「ある特定されにくい程度以上に出来る」という判断を強要されているように考えられる。属性でも、動作でも、それを述べることにどの程度情報があるかという informativeness に関しての原理が働いているように思われる。(v) は、「ある一定以上の量の酒を／酒をたくさん飲んだ」という意味だけではなく、「飲めないのに飲んだ」（量に関しての限定が緩められる）場合にも、「普段は飲まないのに飲んだ」場合にも使えるだろう。しかし、次のような対照が考えられるので、「酒を飲む」の意味での「飲む」には、「量に関しての限定」に対して、informativeness に関する原理が強く働いているとは言えるのであろう。

(viii) 彼女は飲めないのに飲んだ。

(ix) ?彼女は歩けないのに歩いた。

しかし、informativeness に関する原理が働いているとするならば、それをどう辞書と関係付けるかはさらに検討すべき問題だと考えられるので、本稿では取り上げない。

トーリ」など）の省略が「本」の語義になっているとみてもよいし、述語「楽しむ」の意味的限定が、'enjoy' に比べて弱いと考えることも出来る。しかし、下の例は、日本語でも十分な情報が与えられていないと感じられる。関係する問題は大きく3つの場合に分けられる。

**A.　名詞がどのように制限されているか。**

これはさらに2つに分けられる。

**i) 名詞句が英語で言えば定・不定のどちらか、日本語で言えば「その」などで限定されているか、裸であるか。**

次の例を考えよう。

(18)　a.　John began the book.
　　b.　ジョンはその本を始めた。
　　c.　ジョンはその小説を始めた。

(18a) のように定冠詞が付くと（さらに単数である点も重要であろう）、英語を母語とする人には 'to read' を補うのが他の可能性よりも取りやすくなるようである。可能な解釈の広がりの中で、'(a) book' を目的語として取り得る述語の中で、コロケーションと呼べるような広がり（例えば、write, edit, publish, revise, ... ）の中からどれかを選ばなくてはならないのではなく、もっと対象が絞られるのであればそういう例への対処は比較的やさしい。しかし、日本語の例を考えると、文脈にかなり依存するようで、「その」を付けることで、複数の本への広がりが抑えられはするが、まだ、英語ほどには優先的な読みである「読むこと」が出てくるわけではないように感じられる。相対的な比較であるが、この例で言えば、英語よりも日本語の方が解釈をせばめるのが難しいように思える。

**ii)「本」を主要部とする複合名詞が、「始める」の目的語になると、「名詞」が限定されることで、探索範囲がせばまり、結果として解釈を探すことが容易になる。**

(19)　a.　マンガ本始めました。
　　b.　キムチどんぶり始めました。

(19a) の例は、「ました」で終わっていることもあり、「売り始める」、「扱い始める」などの解釈が優位になるように感じられる。(19b) の例は、言い換えると「キムチどんぶりをメニューに加えた」と解釈するのが自然だろう。さらに、両者ともに「マンガ本を」、「キムチどんぶりを」と言わずに、「ヲ」を省略しているので、このような省略は、掲示などに使われる文でよくみられるという知識もはたらいて、それが解釈の可能性を絞り込むのに一役かっているように考えられる。

**B.　日本語の場合を考えると、「本の販売」、「本の執筆」などのように「NP の NP」で主要部を補う手段も考えられる。また、「こと」などの形式名詞を補い、「本を読むこと」、「本を書くこと」等を補うことも考えられる。**

しかし、この方法では、考えられる可能性の数が増えすぎ、しかもその中のどれであるかを特定するのが難しいという難点がある。

**C.　問題となる動詞を主要部とする複合動詞を探す。**

「始める」を複合動詞の後項要素として取る動詞に関しての知識を我々は持っている。その中で、適当なものを探して解釈し直すことを強要されるという考え方である。

(20) a. 読み－始める
　　 b. 書き－始める
　　 c. 売り－始める
　　 d. 扱い－始める

それぞれ全体としては動詞であり、主要な制限は先行要素が課していると考えられる。強い制約である「読む」、「書く」、「売る」、「扱う」が補語に課す制限が優先されることになり、タイプの不一致は解消される。ここで考えている複合動詞の先行要素は、「本」を補語に取れる動詞であれば何でもいいのではない（「本」と動詞の自由語彙結合を考えてはいない）。「本」との結び付きが強いと考えられる動詞が問題であり、数がかなり限定されている。このような結び付きを本稿では、「コロケーション」と考えている。このような「コロケーション」の規定の仕方は、Benson et al. (1986) の自由語彙結合よりは、はるかに限定されたものであるが、彼らの考えている 'collocation' よりはかなり広いものである。「コロケーション」として考えられる可能性の数がうまく限定出来れば、そして直観的には出来そうで、これは有望な方向だと考えられる。[8]

(21) a.
$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{hazime} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos}\ \mathrm{v}] \\ \textbf{sem} & \mathrm{begin'(X,Y)} \\ \textbf{subcat} & \{\mathrm{p[sbj,ga]:X,\ p[obj,wo]:Y}\} \end{bmatrix}$$

b.
$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{hon} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos}\ \mathrm{n}] \\ \textbf{sem} & \mathrm{hon'} \\ \textbf{collocation} & \{\textit{yom, kak}, \ldots\} \end{bmatrix}$$

[8]問題の動詞が後項要素となる複合動詞に関する知識を利用して適切な解釈を探す方向は、矢田部修一氏 (p.c.) の指摘による。

本稿で「コロケーション」と呼んでいる結び付きに関する情報を、辞書の構造にどのように反映させるかは重要な問題である。ここでの記述ように、語彙項目ごとに collocation に関する情報を持たせるのが1つの方法である。しかし、可能な結び付き（= 自由語彙連結）の中から「コロケーション」を取り出したいという動機を考えると、辞書の構造をさらに検討する必要が出てくる。「コロケーション」は、結び付きの強い語彙項目同士が辞書の中でポインタでつながっていて、そのポインタのつながりの強さが強いものであると規定することが考えられる。ポインタのつながりの強さには、連続的な量が割当てられると考える方向である。この方向は、個々の人間の mental lexicon の状態遷移を反映した辞書の構造化を考えようとするものであるが、ここでは詳しい検討は行わない。

## 6 転移 (transfer)

### 6.1 語義の転移 (sense transfer)

ある名詞を使い、その名詞が本来指すものを指さずに、その名詞に何らかの意味で関係を持っていて、その関係が話し手と聞き手との間で共有される文脈が、恒常的に存在する場合、語義の転移が起こると考えられる。恒常的な語義の転移の例として次のようなものがある。

(22) a. アジアには多くの国があります。
　　 b. 日本はアジアと連帯しなくてはならない。

「アジア」は上の例では、「地域の名前」を表しているが、下の例では「地域の名前」ではなく、「その名前が指す地域に住む人々（集合的）」を指している。このような転移は、日本語では多くの場合生産的で、次のような語義転移規則 (rule of sense transfer) があると考えられる。意味的なタイプ間の拡張の可能性の1つだと考えられる。

(23) 語義転移規則：地域の名前（固有名詞）(place name) → その地域に住む人々

語彙記述を考えると次のようになるだろう：

(24)
$$\begin{bmatrix} \textbf{morph} & \langle \textit{azia} \rangle \\ \textbf{head} & [\textbf{pos}\ \mathsf{n}] \\ \textbf{sem} & [\textbf{place}\ (= \text{people collective})] \end{bmatrix}$$

Croft (1993) は、metaphor と metonymy の問題を論じていて、国名が国民を表す例 (Denmark shot down the Maastricht treaty.) を挙げて、metonymy の例だと述べている。しかし、metonymy の例であると考えるかどうかを問題にする立場をここでは取らないで、辞書に登録されているかどうか、あるいはよく起こる事であれば、語義間の拡張を規則として捉えておきたい。

さらに、次のような例がある。

(25) その事務所は予算案に反対している。

複数の人々が集合的な組織を構成していて、そういう組織が業務を行う建物であれば、その建物でその組織の人々を集合的なものとして指せる。次のような語義転移規則が考えられる。

(26) 語義転移規則：人々が組織的な活動を行う建物 → その人々からなる組織

この規則は、可能な拡張の可能性を示しているので、このような拡張がすべての「建物」で起こっているわけではない。語義の転移は個々の語彙項目ごと決まっていると考えられる。しかし、この規則が表す拡張が起こっていない語についても、「反対する」などの、「人・組織」のタイプである名詞を補語に要求する述語と結び付くと、この拡張規則を使って対処することになる。このような対処が出来る規則を仮定することは、本稿の目的である辞書の動的運用を保証するものである。

### 6.2 人名などの固有名詞

固有名詞の中で人の名前は、様々なものを指すために使われる。一般的には、その名前で指される人が関係するものを指すために使われるので、意味のタイプを決めるためには、その名詞を項として取る動詞的な要素などの課す制限を利用するのがまず第1である。しかしそれだけでは十分特定出来ない場合も多い。「漱石を読む」、「バッハを聴く」などがその例だが、述語が十分に対象を特定していない場合には、どう解釈していいかを決めるのが難しくなる。「好きだ」とか「面白い」などと結び付くと、対象の意味的タイプが何であるかを特定するのが難しくなり、解釈が文脈と言語外の知識に大きく依存する。

人名に限らず、述語の課す制約の方が強いので、述語がどれくらい対象を限定しているかが1番重要である。次に、固有名であるかどうかの判断が問題になる。人名に関しては様々な言語外の知識が関わる。聞き手の解釈は大きく言語外の知識に依存することになる。言語外の知識について論じることが本稿の目的ではないので、この問題にはこれ以上立ち入らない。

### 6.3 人を主語に取る形容詞

人を表す名詞が主語になる形容詞述語文を考えてみよう。

(27) a. 私は昨日は大学を休んだ。
b. 彼は気むずかしい。
c. 私が正しく、あなたは間違っている。

(27a) の例のような文は、「人」が主語になり、その人が「そうする意思を持って行う動作」を表す動詞が述語になっている。このような動詞述語文の数は多いが、形容詞を使って属性

を表す (27b) のような文もある。さらに、(27c) のように、人を主語に取りながら、人の属性を表すのではないと考えられる文も数多い。(27c) は、言い換えると次のようになると考えられる。

(28) a. 私の意見が正しく、あなたの意見は間違っている。
b. 私の言ったことが正しく、あなたの言ったことは間違っている。

しかし、「意見・言ったこと・考え」などのどれかに特定出来るわけではない。「正しい」「間違っている」に語彙化されていると考えると、述語の方の語彙記述がそれを反映したものになっている必要がある。

このような「人を表す名詞」が「人の意見等」を表すことは、多くの言語でごく普通に見られる現象であろう。しかし、「人の属性」と「人の意見等」とを区別するのは、そう簡単ではないように考えられる。(27b) に対しても次のような言い換えを考えることが出来るであろうから。

(29) a. 彼は性格が気むずかしい。
b. 彼は性質が気むずかしい。

「性格・性質等」は「人の属性」であるが、「意見・考え等」は「人の属性」ではなく、これらの間には意味的なタイプの違いがあると考えるのが1つの方向である。人を表す名詞を主語に取る形容詞で「人の意見・等」に対しての評価・判断を示すものは、主語の意味のタイプの変換を、形容詞の語彙的な意味の中に取り込んでしまった例だと考えられる。

日本語の形容詞を「属性・感覚・感情」の3つに大別することが、現在広く行われている。属性形容詞だと考えられる語と人を表す語との間で素性の一致を考えるのには、かなりの支えがあるように思われるが、「属性」だと考えにくい形容詞に、辞書でどういう記述を行うかには検討の余地が残る。

### 6.4 二重主語構文との関係

ここで取り上げている問題は、いわゆる二重主語構文（ガーガ構文）をどう考えるかということと関係している。「私」や「彼」などの人を表す名詞だけに限定されているわけではない。(29) の例文は共に二重主語構文である。青山 (1990) が、二重主語構文を取る形容詞述語文の問題をかなり詳しく論じている。次のような例文を検討している (p. 79ff)：

(30) a. 象は鼻が長い [(1a)]
b. 象の鼻は長い [(1b)]
c. ?象は長い [(1c)]

(31) a. 蛇は体が長い [(2a)]

b. 蛇の体は長い [(2b)]
c. 蛇は長い [(2c)]

(32) a. 象は体が大きい [((3a)]
b. 象の体は大きい [(3b)]
c. 象は大きい [(3c)]

(33) a. 象は耳が大きい [(4a)]
b. 象の耳は大きい [(4b)]
c. ?象は大きい [(4c)]

(34) a. この象は体が悪い [(8a)]
b. ?この象は悪い [(8c)]

青山 (1990) は (30a) と (30c) の間に違いがあるとしているかのようであるが、文頭に付ける記号について、次のように断っている (p. 80)。

> 「文法的に許されない '*' と区別して、その文が使用できるとしても、その文の情報が充分でなかったり、同じ番号のついた他の文と意味合いが異なる場合は文頭に '?' をつける。ただし、この区別は小論で扱う問題の性質からいっても、あまり厳密なものとはいえない。」

つまり、(30) の中で (a, b) と比べて (c) には欠けたところがあるように感じられるが、(31) の中では、(a, b) と比べて (c) には欠けたところがあるようには感じられないという判断をしているようである。問題となっている違いは、本来必要だと考えられるものが、欠けているのだが、その欠けているものを補えるかどうかの違いであり、筆者には、(30c) も (31c) も欠けている点では変わりがないように感じられる。(30c) も (31c) と同様に完全な文ではないので、a 文、b 文と同じように考えるわけにはいかない。しかし、(31) と (32) では、「体」という語が出てきており、2 つの項の間の関係が、(32c) と (33c) の対照が示すように、「全体－部分」の関係にあればいいというわけではなく、ある特定の側面を表す語に限定されている点が重要だと考えられる。青山もその点を問題にしていて、「体」と同様な振る舞いをする名詞として、次のような例を挙げている (p. 82–83)：

(35) a. このケーキは形が丸い
b. このケーキの形は丸い
c. このケーキは丸い

(36) a. りんごは色が赤い
b. りんごの色は赤い
c. りんごは赤い

(37) a. ダイヤモンドは値段が高い
b. ダイヤモンドの値段は高い
c. ダイヤモンドは高い

さらに、名詞だけの問題ではないことを示す例として (p. 83)：

(38) a. このケーキは形が悪い
b. ?このケーキは悪い

を挙げている。ここで問題にされている、よく行われる形容詞の3分類（属性・感覚・感情）で言えば属性を表す形容詞は、名詞との結び付きが強く、その結び付きはコロケーションの一種だと考えられる。そして、その結び付き（「形が丸い」のような）が問題に出来る名詞との関係を取り上げる場合に、二重主語構文が可能になり、間に入る名詞が省略出来るようになるのではないだろうか？結び付きが強いかどうか、言い替えると、述語がどこまで対象を限定しているかが重要だと考えられる。次の2つの例の対照を考えてみよう。

(39) a. 形が丸い
b. 形が悪い

(40) a. 体が大きい
b. 体が悪い

(41) a. 値段が高い
b. 値段がべらぼうだ

(39a) では、「丸い」のは「形」本来の可能性である。しかし、「悪い」のは「形」本来の可能性ではないであろう。「体」については、「大きい」と「悪い」のどちらが本来的かはっきりしない。青山 (1990) は、「体」という語を「形」と「値段」と同じ性質を持つものとしているが、そこが問題で、実は、「形」や「値段」と同じような性質を持っているのは、「体」ではなく、「大きさ」や「長さ」ではないのか？（さらに、名詞が generic か specific かの区別も重要であると考えられるが、その点を具体的には取り上げていない。）

(42) a. 象は大きさが大きい

b. 蛇は長さが長い

ここでも、さらに次のような限定が可能である。

(43) a. 象は体の大きさが大きい
b. 蛇は体の長さが長い

そして、「体」という「体全体」を指せる語は言わなくてもよいが、「耳」や「鼻」などの「体」の部分を問題にする際には、その部分を特定する必要がある。こう考えてくると、「象は大きい」と「蛇は長い」との間にはやはり同様の不足があるのだと考えた方が良さそうである。そして、「値段」「長さ」「大きさ」などの対象のある「側面」を取り出して来る名詞と述語の課す制限との間の関係が重要なのだという自然な結論が得られる。「象は大きい」と「蛇は長い」の間には、やはり欠けているものがある。最も易しい復元は、「大きい」と「長い」から、「大きさが大きい」と「長さが長い」で、そういう復元をした後で、「体の大きさが大きい」という復元が可能なのであり、「体の長さが長い」という復元の可能性が考えられる。

もう1つの問題は、「長さが長い」と「大きさが大きい」が「体が大きい」と「体が長い」と比べてある種の冗長さを含んでいる点だろう。これは「大きさ」と「長さ」が「大きい」と「長い」とそれぞれ派生関係にあることが影響しているのだろう。ここで取り上げている段階的である（＝程度副詞で修飾出来る）形容詞は、段階を数値として捉えないという特徴がある。段階を表現する手段は大きく2つある。

(44) i. 段階的な形容詞を様々な程度を表す副詞などで修飾すること。
ii. ある単位で数値を明示すること。

例えば、「値段」は、「（とても）高い」か「（とても）安い」かなどであり、また、「70円」だったり「23000円」だったりする。つまり、多くの段階を表す名詞は、二重主語構文を取る形容詞述語文で、2つ目の項になれる、また「体」はある対象の「全体」を表せるという特徴のある語義を持ち、程度を表すわけではないが、同じく2つ目の項になれるということである。

先に取り上げた、「私が正しく、あなたは間違っている」という例との関係をまとめると、属性形容詞だと考えられる形容詞では、側面語と呼ばれる語との結び付きが強い（コロケーションだと考えられる）場合には、当然に二重主語構文を作れる。その側面語が形容詞と派生関係を持つ場合などは、側面語を示すことが冗長であり、現れないことも多い。しかし、側面語との結び付きが弱い場合には、明示する必要があり、必要なものが明示されないと受け手は、欠けているものを補うことを強要されるのだと考えられる。そのような強要が慣習化することがあり、そういう場合には、形容詞の側で、欠けている情報を補えるようにする必要が出てくると考えられる。

### 6.5 指示の転移 (reference transfer)

語義の転移と指示の転移の違いを考えよう。語義の転移は、その可能性がある程度限定されていると考えられる。また、文脈の大きな支えが無くても起こる。言い替えると、恒常化している。それに対して、指示の転移は、一時的な文脈の共有に大きく依存して、その文脈である対象と関係が深く、その対象を指す表現を使うことで、それと深い関係を持つ対象を指すことである。眼の前に見える対象を指すことが多く、話題を共有している人間の間では、話題により対象世界が厳しく限定されているので、そのような厳しい限定があって始めて、その対象世界で指示したい対象を特定するために必要なことだけを言えば済むのである。指示の転移としてよく例に挙げられるのは次のようなものである:

(45) The ham sandwich at table 7 seems irritated.

2 つの戦略が考えられる。述語の課す制約が強いと考え、seems irritated から、主語の hamsandwich at table 7 を、human あるいは animate のタイプとして解釈することでメタファの捉え方になる。つまり、おとぎ話などの世界で、ham sandwich の格好をした人間（あるいは動物）がいて、その人間（あるいは動物）が「7 番テーブルでいらいらしているらしい」という解釈をすることになる。狭義の擬人化である。

しかし、指示の転移として問題にされるのは、このような擬人化としての捉え方ではなく、述語の課す制限に合った解釈を、明示されている表現が付加的な働きをしている、その主要部を探すことである。狭義のメタファよりもむしろメトニミ的な捉え方に近い。述語である seems irritated から、主語が human であると考え、ham sandwich は、人間ではないので、The person who ordered/is eating ham sandwich at table 7 のような解釈を探すことになる。そうすると、擬人化のような、多くの場合に非日常的である解釈を避けることが出来る。厄介なのは、明示されているものと、本来指そうとしているものとの関係が大きく文脈に依存していることである。「大きく文脈に依存している」ということは、一般的に決めることは難しいが、具体的な文脈の情報で対処が可能なはずで、それが可能でなければ使えない。一般的に具体的な文脈の多様性を問題にするのは難しいので、ここではこれ以上立ち入らない。

## 7 まとめ

本稿では、特に語彙に関わる問題を中心に「強要」の例だと考えられる問題を論じた。句構造文法一般、あるいは広く制約に基づく文法理論に見られる考え方の中で重要なものとして、母親ノードと娘ノードとの間の関係、局所的な句構造間の関係を問題にするという方向がある。この点では、副詞の段階性／非段階性に関しての制約や、述語が補語に課す制約が、強要を問題にする際にも重要であることには変わりがない。しかし、強要の例だと考えられるものには、ある種の逸脱、あるいは欠落があるので、それに対処するためには、このよう

な局所的な制約だけでは不十分だと考えられる場合がある。そして不十分である場合にはコロケーションなどに関する知識が参照されているように考えられる。境界を定めるのが難しいが、文法の中核をなす制約は、局所的な構造の中で充たされねばならず、何らかの理由でそれだけでは対処出来ない場合に、コロケーションなどの語彙項目に関連する情報を参照していると考えるのが無理のない捉え方であろう。

日本語は談話への依存度が高い言語だと言われるが、言語に関わる知識と言語外の知識とのインターフェースになるとも考えられるコロケーションについての情報が、不完全な文を解釈することを強要された場合に、重要な助けになっていると考えられる。辞書を大規模知識ベースだと考える方向が強要の問題を考える際には重要になってくるだろう。また、最近の自然言語処理に関する研究の方向として重要だと考えられる、「頑健であること」と「事例・用例ベースであること」の2つは、まさに言語運用の実態を考察するために重要であろうし、そこで重要な問題となるであろう強要に関わる問題への対処は、辞書の充実を図ることが、大きな課題となる。これは言語知識と言語外知識とを関連付けることだと言えるであろうし、言語外の知識がどのように言語内の知識となるか／両者はどうつながっているかという問題だと考えることも出来るだろう。

しかし、大きな問題として残るのは、「強要」とは何かという問題である。本稿では、辞書に記載される情報について検討したので、直感的な規定の仕方であるが、「辞書に確定的に記述された語彙的情報だけでは対処出来ないような例を解釈すること」を「強要」だと考えた。そして、「強要」される場合を大きく以下のように分けることが出来るのではないかというのが暫定的な結論である。

(46) i. 文法的な素性の異なった値での解釈の強要
ii. 意味的に可能なタイプの転換による解釈の強要
iii. 述語による主要部を復元する解釈の強要
iv. 指示の転移など大きく文脈に依存した解釈の強要

「強要」をさらに詳細に規定すること、上に挙げた強要の場合分けの間の関係を検討すること、また強要の度合いを考慮するかどうかなどが、今後の課題である。これらの課題は、語彙的知識の表示と運用の問題だと考えられるので、大きくは辞書をいかに構造化するかが課題であることになる。

## 参考文献

青山文啓 (1990).「二項関係についてのおぼえがき」.『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究: 10』, pp. 77–122. 情報処理振興事業協会 技術センター, 東京.

Benson, M., Benson, E., & Ilson, R. (1986). *The BBI Combinatory Dictionary of English: A Guide to Word Combination*. John Benjamins, Amsterdam.

Croft, W. (1993). The role of domain in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics*, **4**, 353–370.

Gunji, T. & Hasida, K. (1994). Measurement and quantification. 郡司隆男（編），『日本語句構造文法に基づく効率的な構文解析の研究』. 大阪大学. 平成 5 年度文部省科学研究費補助金（一般研究 (B) ）研究成果報告書.

Gunji, T. & Hasida, K. (Eds.) (in preparation). *A Constraint-Based Grammar of Japanese*. Kluwer, Dordrecht.

井口厚夫 (to appear). 「短絡節とコロケーション」. 獨協大学教養諸学研究.

IPA (to appear). *IPA Lexicon Basic Japanese Nouns*. 情報処理振興事業協会, 東京.

工藤浩 (1984). 「程度副詞をめぐって」. 渡辺実（編），『副用語の研究』, pp. 177–198. 明治書院, 東京.

Lehrer, A. (1990). Polysemy, conventinality, and the structure of lexicon. *Cognitive Linguistics*, **1**, 207–246.

Pollard, C. J. & Sag, I. A. (1994). *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. The University of Chicago Press, Chicago.

Pustejovsky, J. (1991). The generative lexicon. *Computational Linguistics*, **17**, 409–441.

Pustejovsky, J. (1993). Type coercion and lexical selection. In Pustejovsky, J. (Ed.), *Semantics and the Lexicon*, pp. 73–94. Kluwer, Dordrecht.

Pustejovsky, J. & Boguraev, B. (1993). Lexical knowledge representation and natural language processing. *Artificial Intelligence*, **63**, 193–223.

Sag, I. A. (1990). Taking performance seriously. Talk given at Waseda University, Tokyo, on Oct. 27th.

Sag, I. A. & Pollard, C. (1991). An integrated theory of complement control. *Language*, **67**, 63–113.

Sag, I. A. & Szabolcsi, A. (Eds.) (1992). *Lexical Matters*. Center for the Study of Language and Information, Stanford University, Stanford.

Sinclair, J. (Ed.) (1987). *Collins COBUILD English Language Dictionary*. John Benjamins, London.

外池俊幸 (1990).「形容詞の段階性／非段階性」.『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究: 10』, pp. 17–76. 情報処理振興事業協会 技術センター, 東京.

外池俊幸 (1992).「自然言語を捉えるアーキテクチャ—運用論などを取り込んだ柔軟なシステムの必要性—」.『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究: 11』, pp. 1–82. 情報処理振興事業協会 技術センター, 東京.

外池俊幸 (1993).「言語知識の管理について」.『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究: 12』, pp. 1–53. 情報処理振興事業協会 技術センター, 東京.

Tonoike, T. (1994). Coercion—what we can do when coerced in interpreting sentences. Talk given at the Symposium of Nichibunken Team Research Project: "Study on Constraint-based Structure of Japanese Grammar", held at International Research Center for Japanese Studies, Dec. 20–22.